

静岡県文化プログラム

2019年度 地域密着プログラムを対象とした試行的評価

2021年3月

静岡県文化プログラム推進委員会

はじめに

オリンピック憲章には、「オリンピズムは、スポーツを文化、教育と融合させ、生き方の創造を探求するもの」と謳われ、開催都市が「文化プログラム」を開催するよう定められており、東京 2020 オリンピック・パラリンピックについても、2014 年秋の全国知事会議で川勝知事が提言し、日本全国で「文化プログラム」を展開する方針が採択されました。

こうした機運を受け、2016 年 5 月に設置した静岡県文化プログラム推進委員会では、東京 2020 オリンピック・パラリンピックを目標に『地域とアートが共鳴する』をテーマとして、本県が世界に誇る舞台芸術の担い手 SPACによる「全国的プログラム」、推進委員会と県内の文化・芸術団体が連携して開催する「県域プログラム」、市町や団体等による「地域密着プログラム」の三つのカテゴリーで、併せて 1,000 以上の文化プログラムを認証し、展開しています。

この評価報告書は、2019 年度事業として推進委員会が採択した地域密着プログラム 19 事業と、その支援制度(プログラム・コーディネーターによる支援と財政的支援)を対象に、実験的に行なった評価をまとめたものです。

アーティストなどの文化の担い手が、まちづくり、福祉、教育、産業など社会の様々な分野の担い手と協働し、地域に根ざして活動することは、交流人口の拡大や社会課題の解決等の様々な成果を生み出す可能性を秘めています。

今回の評価を通じ、本プログラムの目的や価値をより多くの人々と共有するためのコミュニケーション手段として、また事業内容をより良くしていくための手段として、評価の果たす役割が大きいことが確認されました。この評価の試行により培った手法を 2021 年 1 月に設置されたアーツカウンシルしずおかへ継承し、さらに発展させたいと考えております。

報告書の構成は、 I から V までは 2019 年度採択 19 事業と支援制度を対象とした評価、VIは 19 事業の概要紹介、VIIは 19 事業のうち 3 事業を対象に行った詳細評価となっています。新たな活動に対する評価の試みとして御一読いただければ幸いです。

2021 年 3 月 静岡県文化プログラム推進委員会 委員長 鈴木壽美子

一 目次 一

I	評価の目的	5
II	評価の対象	6
Ш	評価実施体制	9
IV	評価の設計	9
	1.評価の実施方針	9
	2.評価の構成	9
٧	評価の手法及び結果	11
	1.個別事業の簡易評価(淡い評価)	11
	(1) 評価の手法	11
	(2) 評価の結果	12
	2.個別事業の詳細評価(濃い評価)	14
	(1) 評価の手法	14
	(2) 評価の結果	14
	3.全体評価	16
	(1) 評価の手法	16
	ア. セオリーオブチェンジの設定	16
	イ.初期アウトカムの評価基準とルーブリックの設定	17
	ウ. アンケート調査とヒアリング調査の実施	18
	(2) 評価の結果:評価項目1 プログラムの成果	18
	ア. 評価基準 1.1、2.1、3.1 の達成状況	18
	イ. 評価基準 1.2、2.2、3.2 の定性的検証	20
	ウ. 評価項目1:プログラムの成果の評価結果のまとめ	21
	(3) 評価の結果:評価項目 2 手段の妥当性	21
	ア. 価値1:創造的な課題解決手段の提供	22
	イ. 価値 2 :社会関係資本の蓄積の促進	22
	ウ. 価値3:地域社会における変化の促進	23
	エ. 評価項目 2 :手段の妥当性の評価結果のまとめ	24
	(4) 評価の結果:評価項目3 支援制度の検証	25
	ア. 地域密着プログラムの特徴	25
	イ. 地域密着プログラムの課題と今後の方向性	26
	(5) 全体評価の結果のまとめ	29
	(6) アーツカウンシルに向けて	
VI	2019 年度地域密着プログラムのふりかえり	
VII	個別事業の詳細評価(濃い評価)	
	· Scale Laboratory	76
	・UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川 2020	
	・認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツ 表現未満、プロジェクト	

I 評価の目的

文化・芸術分野の事業を対象とする評価は、事業の効果・成果の発現が一概に予期できない、生み出している価値が見えづらい特性があり、定量的な指標設定が難しいといわれている。

本評価は、2017年度から実施してきた「静岡県文化プログラム」の「地域密着プログラム」を対象とし、困難な評価を試みた本県では初めての試行的な取組である。

評価の目的は、文化・芸術を通じた地域活性化等を目指す地域密着プログラムの成果を可視化し、同プログラムの四つの目的の達成や、取組に向けた三つのポイントを軸に、さらには、静岡県の文化・芸術の振興や地域の活性化等に貢献したかを検証し、その結果を基に、2021 年度から本格稼動するアーツカウンシルにおける効果的な支援制度の設計・運用に活用することである。

なお、本評価では事業を推進する中で新たな評価手法を模索するとともに、今後の文化・芸術分野 の活動を対象とした評価方法についての提案をも試みたものである。

Ⅱ 評価の対象

静岡県では、東京 2020 オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムを実施するため、2015 年度に準備委員会を設け、「オリンピック文化プログラムに向けた文化資源調査」を実施した。2016 年度に静岡県文化プログラム推進委員会を設置して以降、全国的プログラム、県域プログラム、地域密着プログラムの 3 つのカテゴリーで文化プログラムを展開している。プログラムの具体的な目的として以下の4点を、取組のポイントとしてさらに3点を掲げている。

目的

- ◆ 県内の潜在的な文化資源、地域資源、人的資源などを目に見える形で示します
- ◆ 他者との違いに価値を見出し認め合う環境を育みます
- ◆ すべての人々が持つ創造性に基づく多様な生き方の可能性を提起します
- ◆ 文化・芸術を、地域的・社会的課題への対応に生かします

取組

◆ 多様性:地域、社会、時代、分野、国籍等における多様性を活かした展開

◆ 多極性:県内各地の潜在的文化資源を生かした多極的な展開

◆ 持続性:一過性でなく、2020年以降を視野に入れた持続的な展開

【地域密着プログラム】

本評価の直接の対象は、2019 年度に支援を行った地域密着プログラム 19 事業とそれら事業を対象とした支援制度である。

地域密着プログラムは、2017 年度から 2019 年度の間、静岡県内の 25 の団体に対し延べ 44 事業の支援を行った。公募の際に、オリンピック・パラリンピックに向けた祝祭性の高い「文化芸術振興事業」と文化の力を地域や社会課題の対応に活用する「地域・社会課題対応型事業」の二つの枠を設け、案件の特徴に合わせて支援を行っている。

地域密着プログラムの特徴の一つは、単年度の支援プログラムでありながら、オリンピック年である 2020 年を一つの目途に、開始当初から複数年度にまたぐ支援を想定していたところにある。その背景には、文化・芸術事業においては、地域で「芽」が出るまでそれなりに時間がかかるということを前提に、先駆性の高い事業でなおかつポテンシャルが高ければ息長く支えていこうという意図がある。支援を申請する団体に対しては、申請年度の事業目標に限らず数年後までの事業ビジョンの記述を依頼し、審査に当たっても中長期的な観点から事業の継続性・発展性、波及効果等を検討した上で採択している。

【2019 年度採択 19 事業】

2019年度の採択事業は下表のとおりである。

なお、2020年3月に開催を予定していたプログラムについては、新型コロナウイルスの感染予防の 観点から縮小又は中止したため、準備等に要した経費を精査した上で負担金を拠出した。

《 A 祝祭プログラム:7事業》

実施団体	主な拠点	プログラムの名称	プログラムの概要	支援期間	2019 助成額 (単位: 千円)
特定非営利活動法 人ACT.JT静 岡支部	伊東市	ふじのくに大田楽 -ODORIKO プロジ ェクト 2020 - 【中止】	伊豆地域の伝統芸能団体が「大田楽」を披露するとともに、自転車競技を盛り上げるための自転車パレードを創作	2017~	1,420 千円
熱海未来音楽祭	熱海市	熱海未来音楽祭	熱海出身・在住のアーティストが 中心となり、熱海の街を舞台にコ ンサートやパフォーマンス、ワー クショップ等を実施	2019~	700 千円
一般社団法人熱海怪獣映画祭	熱海市	第二回熱海怪獣映画祭	怪獣映画とゆかりのある熱海で開催している映画祭。「怪獣の聖地熱海」のブランド化に向け二回目を開催	2019~	2,057 千円
しゃぎり フェスティバル 実行委員会	三島市	第3回しゃぎりフェ スティバル	三島の伝統芸能「しゃぎり」の永 続的発展に向け、フェスティバル を中心とした各種活動を実施	2019~	916 千円
静岡市文化・ クリエイティブ 産業振興センタ ー	静岡市	七間町八プニング4 【中止】	静岡市の七間町を舞台としたパフォーミングアーツ・フェスティバルの開催	2019~	1,604 千円
特定非営利活動法 人クロスメディ ア しまだ	川根本町	UNMANNED 無人駅 の芸術祭/大井川 2020【縮小】	大井川鉄道の無人駅を核に、アー ティストと住民との交流を密にし ながら作品を制作・発表する地域 芸術祭	2017~	5,000 千円
かけがわ茶エン ナーレ実行委員 会	掛川市	かけがわ茶エンナー レ 2020	3年に1度開催する「茶」と「アート」を融合させた芸術祭。地域 資源の可能性を広げ価値を高めることで、観光・産業・シティプロモーションにつなぐ	2017~	5,000 千円

《 B 文化の力活用プログラム:12事業》

実施団体	主な 拠点	プログラムの 名称	プログラムの概要	支援 期間	2019 助成額 (単位:千円)
松崎町のうたを 育てる会	松崎町	FULL-SATO プロジェクト - 松崎町と歌を育てる -	町と包括協定を結ぶ常葉大学教員と 音楽家を中心に展開。完成した「う た」を活用してコミュニティを活性 化	2019 ~	1,505 千円
Meets by Arts @ATAMI 実行委 員会	熱海市	アーツ・プロジェクトスクール for ATAMI ART FAIR	地域に根付いた文化事業を実施する 人材を育成するためのアートスクー ルを開催	2018 ~	1,483 千円
Scale Laboratory	函 南 町	となりのアーテ ィストプロジェ クト	気軽に芸術文化に親しみアーティストと関わる環境づくりを目的に、特定の拠点を持たず様々な団体と連携し、パフォーミングアーツ中心の事業を展開	2017 ~	1,988 千円
御殿場市東山旧岸邸	御殿場市	文化継承プロジェクト〜伝統芸能と食文化〜	旧岸邸の指定管理者が「伝統芸能講座」に食文化を連動させ、領域を横断した文化継承を考える機会を提供	2019	523 千円
富士の山ビエン ナーレ実行委員 会	静 富士 宮市 市市	するがのくにの 芸術祭 富士の 山ビエンナーレ 【縮小】	富士市、静岡市、富士宮市の3市を 跨ぐ地域芸術祭。2020年の本番年 を前に、2019年度はマイクロレジ デンス事業等を実施	2017 ~	2,000 千円
企業組合くれば	島田市	WABISA VILLAGE SASAMA	2019 年 11 月に開催する第 5 回ささま国際陶芸祭とコラボし、廃校をスウェーデンパビリオンとして活用	2019 ~	800 千円
川根本町伝統文 化保存会	川根本町	伝統文化交流会	「伝統文化伝承館」建設を契機に、 町内の伝統文化団体が保存会を結成 し、後継者育成や観光資源化に取り 組む	2019 ~	1,463 千円
一般社団法人 ふじのくに文教 創造ネットワー ク	掛川市	地域部活・掛川 未来創造部 Palette 【縮小】	複数の中学校の生徒が集まり、音楽、演劇、ダンスを中心に、アーティストを講師に迎え行う文化系部活動	2017 ~	1,750 千円
原泉アートプロ ジェクト	掛川市	原泉アートデイ ズ!2019 〜泉とともに〜	掛川市最北部の中山間地に位置する 原泉地区で地域住民の協力を得て実 施するアーティストインレジデン ス、現代アート展	2019 ~	1,200 千円
ふじのくにラボ	森町	ふじのくにラボ	舞楽祭事の食事を調査し再現することにより、若者や留学する学生等に地域の食文化を周知し、現代風アレンジなどを通じ継承に貢献	2019 ~	1,500 千円
社会福祉法人 ひかりの園(浜 松市根洗学園)	浜松市	わが家流子育てのすすめ	保育現場の技に焦点を当てた映像制作や、柔軟な子育て環境を各家庭につくることを目的としたワークショップ等を実施	2017 ~	1,591 千円
認定 NPO 法人 クリエイティブ サポートレッツ	浜松市	表現未満、プロ ジェクト	ソーシャルインクルージョンを目指し、中心市街地を舞台とした文化祭や、市民を対象とした学びの場を提供	2017 ~	2,000 千円

Ⅲ 評価実施体制

今回の評価は、地域密着プログラム及び将来設置予定のアーツカウンシルの助成事業における自己 評価手法を確立するための試行であり、評価手法自体を検討しながら、評価を行うという作業となった。

このため、プログラム評価の手法に関して研究実績のある一般財団法人 C S O ネットワーク (以下、「評価チーム」) に評価調査業務を委託し、プログラム・コーディネーター及び文化プログラム推進委員会事務局 (以下、「事務局」) と常に協議を行いながら実施した。本報告書は、評価チームが作成した評価報告書をもとに、文化プログラム推進委員会事務局と評価チームが改めて公開用としてとりまとめたものである。

IV 評価の設計

1.評価の実施方針

(1) 創造性と柔軟性の尊重

標準化された評価手法が確立されておらず、転用できる手段や指標が少ない文化・芸術分野における評価では、評価基準や指標づくりに十分時間を割き、実践で使っては修正をするという反復プロセスを通じて、その精度を上げていく過程が必要となる。そのため、評価の過程で、常に新たな手法を考えつつ、試行錯誤を繰り返すという、創造性・柔軟性を尊重する姿勢を重視した。

(2) 対話・協働による発展的評価1

今回の評価は、発展的評価のアプローチを実施プロセスに導入し、従来の外部評価のように評価者が評価対象の事業者から独立して評価を行うのではなく、評価者が事業者に伴走しながら、評価の各工程において、意思形成をサポートし、ファシリテーターとしての役割を担う形を取った。具体的には、評価チームがプログラム・コーディネーター及び事務局と各局面において理念や方針について議論を重ね、協働して取り組むことにより、評価の精度と実現可能性を高める作業を進めた。

2.評価の構成

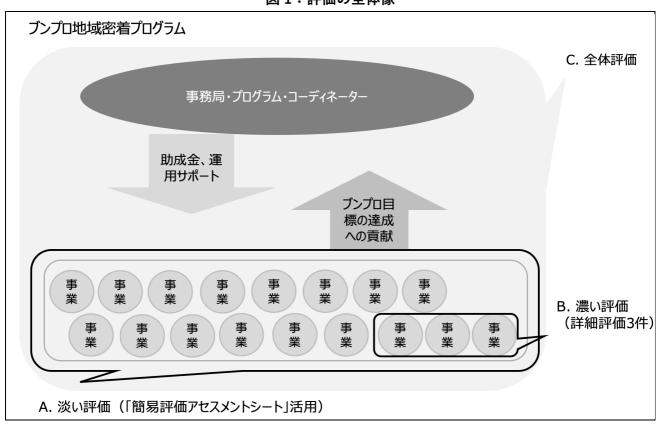
地域密着プログラムを以下3つの構成要素を通じてそれぞれの切り口から分析し、相互補完的に評価結果を抽出した。3つの構成要素とそれぞれの対象範囲を「図1:評価の全体像」で示す。

¹ 発展的評価(Developmental Evaluation)とは「実用重視の評価」を初めて唱え、評価関連著書も多数執筆しているマイケル・クィン・パットン(Michael Quinn Patton)が 1994 年より提唱してきた評価のアプローチであり、事業(や事象)が発展・変遷・様変わり(development)しているときにふさわしく、主に発展・変革を志向する評価といわれている。

<評価の3つの構成要素>

評価の構成要素	概要	ねらい	主な評価者
1.個別事業の簡易評価 (淡い評価)	「簡易評価アセスメント シート」を用いた個別評 価(採択 19 事業)	団体が自らの事業を客観視 し、事業価値の見極めや見直 しを図る機会とする。	実施団体と担当 プログラム・コ ーディネーター による合同評価
2.個別事業の詳細評価 (濃い評価)	詳細な事業効果の検証・ 評価(採択 19 事業中、 3事業を抽出)	団体のみならず、事業に関わった人達が見出している事業 の価値を明らかにする。	評価チーム
3.全体評価	上記1、2の評価結果に 基づく地域密着プログラ ム全体の包括的評価	他の支援制度に対する地域密 着プログラムの比較優位性や 課題等を抽出し、支援制度の 改善を図る。	評価チーム

図1:評価の全体像



V 評価の手法及び結果

1.個別事業の簡易評価(淡い評価)

(1) 評価の手法

19事業に対して、後述の「簡易評価アセスメントシート」を用いて評価を行った。

まず、採択団体が事業実施前に自己評価を行い(事前自己評価)、事業実施後に改めて自己評価(事後自己評価)を行うとともに、プログラム・コーディネーター(PC)が事後評価(事後PC評価)を実施した。

※「簡易評価アセスメントシート」

教育分野において、学習達成度など、単なる数値による評価が難しい事象に対して、複数の観点(項目)と尺度(達成度合いを測る基準)によるマトリクス表を設定し、達成度合いを評価する「ルーブリック」が用いられている。近年は、教育分野以外の評価においても、数値による指標化が難しい事象に対して、定性的な情報を使いながら、ルーブリックを構築し、事業の達成度合いを表す評価が注目されている。

今回の評価では、このルーブリックの手法を活用し、文化プログラムの目的・取組のポイント等に留意しつつ、下記の6つの評価基準による「簡易評価アセスメントシート」を作成し、個別事業の成果達成度を評価するともに、「全体評価」にも活用した。(添付資料1参照)

く6つの評価基準>

評価基準	評価基準の定義
①地域資源・社会課題 への対応	事業が、文化芸術分野を超えて、文化活動を通じて地域資源や社会課題を顕在化し、地域の魅力・可能性や社会課題のとらえ方を発見/再発見/再定義したり、地域活性化の糸口を見つけるきっかけを提供したりしていること
②多様性と包摂性	全ての人が潜在的に表現者や文化の担い手であるということを前提に、対象事業に、関係する様々な人達の可能性を引き出す工夫・仕組みがみられること
③事業の波及効果	一過性のイベントに留まらず、2020年以降を視野に入れた持続的な展開が期待されるような事業であること。事業の対象地域あるいは対象としているグループ以外での展開が期待できる事業であること
④革新性と適応性	既存の文化芸術活動や地域の社会課題のとらえ方などにおいて「現状」への疑問を掲げ、より良いアプローチを常に模索しながら変化していること。また、自団体の活動においても、現状維持に甘んじることなく、社会情勢を鑑み、客観視して改善・変化を生み出す姿勢が事業に反映されていること
⑤伝える力	団体がどのようなきっかけをもとに思いをもって、いかなる事業を目指している のかを積極的に発信していること
⑥自立発展性	団体が、経済的、人材的、企画運営面などで自立している状態で事業を実施できているかを確認することにより、助成期間後の事業の自立発展性があること(a:財政面、b:人材面、c:企画運営面の3項目で評価)

(2) 評価の結果

6つの評価基準ごとに 4 段階の達成度と照合して、それぞれ到達している団体数を下表のとおりとりまとめた。なお、表中の「事前評価」は、事業計画時に行なった団体と担当プログラム・コーディネーター(PC)による合同評価の結果を表し、「事後評価」は、団体と担当 PC が、年度末にそれぞれ行った評価の結果を併記している。

評価基準ごとの簡易評価(淡い評価)の結果からは、文化プログラムの目的である①地域資源の顕在化・社会課題への対応、②多様性と包摂性や、その広がりを表す③事業の波及効果、また、それぞれのプログラムの力とも言える④革新性と適応性や⑤伝える力については比較的多くの団体が高めの達成度合いを報告している一方、プログラムの取組ポイントの一つである持続的展開のための⑥自立発展性の項目において、概ね達成度合いが低く、事業の継続を図るためには助成金などを引き続き活用するなど、今後、アーツカウンシルにおいて課題解決の方策が必要であることが確認できた。

<評価基準ごとの淡い評価の結果>

== /= +	\±-4\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\	評価の分布		
評価基準	達成度合い	事前評価	事後自己評価	事後PC評価
	4:達成できている	4 団体	4 団体	2 団体
1)	3:ほぼ達成できている	7 団体	9 団体	10 団体
地域資源・社会課題への	2:ある程度達成できている	8 団体	4 団体	7 団体
対応	1:達成できていない	0 団体	2 団体	0 団体
	平均点	2.6	2.7	2.6
	4:達成できている	1 団体	5 団体	5 団体
	3:ほぼ達成できている	9 団体	6 団体	7 団体
2	2:ある程度達成できている	7 団体	5 団体	5 団体
多様性と包摂性	1:達成できていない	2団体	3 団体	2 団体
	平均点	2.3	2.6	2.6
	4:達成できている	3 団体	4 団体	3 団体
	3:ほぼ達成できている	4 団体	6団体	7 団体
3	2:ある程度達成できている	9団体	7 団体	7 団体
事業の波及効果				
	1:達成できていない	3 団体	2 団体	2 団体
	平均点	2.2	2.5	2.4
	4:達成できている	2 団体	4 団体	4 団体
4)	3:ほぼ達成できている	7 団体	9 団体	8 団体
ン 革新性と適応性	2:ある程度達成できている	10 団体	5 団体	6 団体
1 1/11 2 2 2 1 2 1 2	1:達成できていない	0 団体	1 団体	1 団体
	平均点	2.5	2.7	2.6
	4:達成できている	1 団体	3 団体	4 団体
6	3:ほぼ達成できている	9 団体	9 団体	8 団体
⑤ 伝える力	2:ある程度達成できている	7 団体	6 団体	6 団体
は んの刀	1:達成できていない	2 団体	1 団体	1 団体
	平均点	2.2	2.7	2.6
	4:達成できている	2 団体	3 団体	2 団体
_	3:ほぼ達成できている	3 団体	4 団体	5 団体
6	2:ある程度達成できている	10 団体	11 団体	10 団体
自立発展性	1:達成できていない	2 団体	1団体	2 団体
	平均点	2.2	2.4	2.2
	4:達成できている	1団体	2 団体	1 団体
	3:ほぼ達成できている	4 団体	3団体	4 団体
a	2:ある程度達成できている	9団体	9 団体	9団体
財政面	1:達成できていない	5団体	5団体	5団体
	平均点			
		2.0	2.1	2.0
	4:達成できている	2団体	3団体	3団体
b	3:ほぼ達成できている	7団体	6団体	6 団体
人材面	2:ある程度達成できている	7団体	8団体	7 団体
	1:達成できていない	3 団体	2 団体	3 団体
	平均点	2.2	2.4	2.4
	4:達成できている	2 団体	7 団体	6 団体
С	3:ほぼ達成できている	9 団体	5 団体	5 団体
企画運営面	2:ある程度達成できている	6 団体	5 団体	7 団体
工画在古山	1:達成できていない	2 団体	2 団体	1 団体
	平均点	2.5	2.7	2.7

※ 評価に小数点以下の数値がある場合は、四捨五入により配分した

2.個別事業の詳細評価 (濃い評価)

(1) 評価の手法

2019年度採択事業のうち、前年度から継続して支援を行ってきた3団体の事業を抽出し、それぞれが、地域においてどのような価値を生み出し、どのような事業効果が見られるかを、セオリーオブチェンジ、ルーブリックの作成、団体へのヒアリングなどを踏まえ、より詳細に検証した。

(2) 評価の結果

濃い評価結果の詳細は本報告書 VII 以降に後述するが、対象事業がそれぞれの社会的課題に対し、文化・芸術的アプローチを生かしてどのような活動を行い、どのような成果を挙げているのかについて、以下概要をとりまとめた。

採択団体	Scale Laboratory(スケラボ)
社会課題	地域の魅力の低下、アートを体験する機会の減少
活動の概要	沼津市等県東部を中心に公演やワークショップ等、様々な形でアートを楽しむ機会を提供している。提供する機会は「観る」ことから「創る」ことまで幅広く、使われなくなった商業施設の一角やストリート、保育園や学校等、多様な場でアートを繰り広げている。
成果の概要	スケラボが最も多くの活動を行う沼津市は、県東部の拠点都市として発展し、かつては沼津駅前に百貨店が並び、文化の発信地にもなっていたが、近年は人口減少が続き、2014年には駅前の全ての百貨店が閉店した。アーティストの育成を行ったり、地域に本格的なアートを頻繁に提供したりするアートセンターに類するような拠点は無いのが現状である。このように多様なアートに触れる機会が限られている地域において、ジャンルにとらわれず、常に新しい表現を創り出すスケラボの活動は、子どもから本格的なアートを求める大人まで幅広い年代の観客を惹きつけている。また、ワークショップやアウトリーチは参加者がアーティストと近い距離で、自ら主体的にアートにかかわり、参加者はアーティストのサポートのもと、自由な発想や表現を伸び伸びと表すことができるようになり、これにより自己効力感や生活の質を向上させることにつながっている。さらに、商店街やショッピングモールなどで、パフォーマンスを展開することにより、賑わいがあり、幸せを感じる場所づくりを目指す事業者の想いの実現に寄与している。スケラボが良質なアートを地域に提供していることに加えて、アーティストの活躍の場や商業施設などの文化・芸術資源の開発、ネットワークづくり等に貢献していることが明らかになった。

採択団体	クロスメディアしまだ
社会課題	地域の魅力の低下、地域資源の埋没
活動の概要	地域の重要なライフラインである大井川鐵道が産業の変化や人口減少といった要因から、利用者が減り、いくつかの駅が無人駅化していった状況に逆転の発想で目を向け、大井川 鐵道の無人駅とういう「場」を支える地域住民の存在に魅力を見出し、地域内外に発信する「UNMANNED 無人駅の芸術祭」を実施している。
成果の概要	参加したアーティストは、地域住民を第一に考えて彼らの目線で作品を仕上げており、開催期間中は外からの芸術祭参加者よりも地域の人の鑑賞や利用が多かった作品も少なくなかった。また地域住民たちが自分たちで身にまとうことで完成する作品もあった。アーティストの高い感性と、入念なリサーチ、または地域住民との信頼関係やコミュニケーションを積み重ねることにより作品が生まれており、それが住民に新しく地域を見る視点を提示している様子が多く見受けられた。アートだからこそできる視点の提示が住民に対して多く提供され、アーティストたちが様々なアプローチで地域の魅力を発掘しているということが分かった。このようなアートの仕掛けや観点によって、大井川鐵道沿線地域の魅力・価値の再発見につながっていると考えられる。

採択団体	クリエイティブサポート レッツ
社会課題	ソーシャル・インクルージョン(社会包摂)
活動の概要	障害福祉施設でありながら地域の文化創造発信拠点となることを目指し、浜松市の中心市街地に「たけし文化センター連尺町」を構える。 レッツが見出したコンセプト「表現未満、」は、特別な力のある人がつくる特別な行為ではなく、誰もが持っている「自分を表す方法としての表現」を大切にしていく文化を育てることを目的としている。 「表現未満、」プロジェクトでは、外部の人が気軽に福祉施設を訪れ、自由に滞在してもらう「観光」等、普段、障害のある人との交わりを持たない人達に、文化・芸術的アプローチを通じた多様な関わり方を用意している。
成果の概要	社会包摂を実現するためには、一人ひとりが違いを受け入れ、他者のありのままの存在を 肯定するという価値観そのものを広めていく必要がある。 単に関わるだけでなく、障害のある人にはありのままでいることを保障し、訪問者には自 由な過ごし方を保障することで、訪問者自らが障害のある人との関わり方を探求し、発見 していく過程が垣間見えた。 もう一方で、レッツとつながりをもった福祉施設や小学校運営者へインタビューからは、 レッツから、障害のある人への多様なアプローチを知り、その後、自身の施設で独自の企 画を立ち上げたり、学校で既存の取り組みを発展させるなど、社会包摂の実践の場の裾野 が広がっている様子がみられた。 一人ひとりがフラットに交わる機会を生み、自己と他者の間にある垣根に変化がみられた と同時に、地域での社会包摂の深みがみられた。

3.全体評価

全体評価においては、以下の3つの評価項目と評価設問を設定し、評価を実施した。

評価項目	評価設問
(1)プログラムの成果	目指す成果(アウトカム)はどの程度達成されたか?個々の団体は具体的にどのような地域課題の解決、あるいは、地域資源の再認識による新たな価値の創造を目指し、どのような変化を地域で引き起こしているか?
(2)手段の妥当性	文化・芸術を活用するアプローチには、どのような価値が認められるか?文 化・芸術手法の活用がなくても同じような効果は見込めるか?
(3)支援制度の検証	地域密着プログラムの支援制度としての特徴(強みと弱み)は何か?その特徴 (強みと弱み)は、どのようにプログラムの効果を促進・阻害したか?

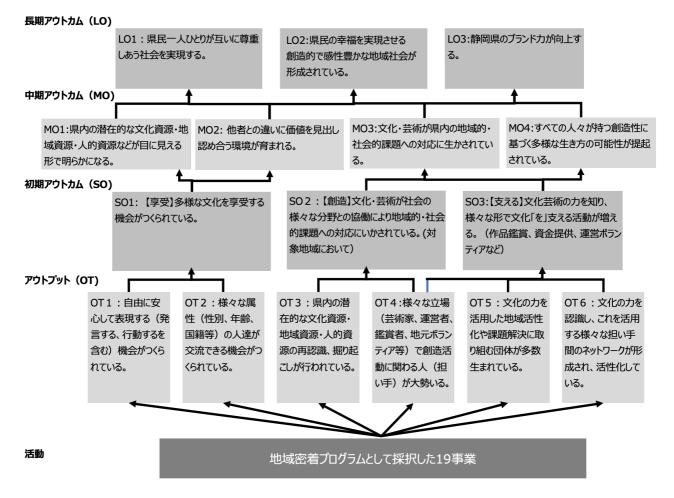
(1) 評価の手法

ア. セオリーオブチェンジの設定

評価対象となるプログラムが何を目指し、そのためにどのような道筋をたどり、どのような成果(アウトカム)を発現させようとしているのかという意図(プログラム理論)を確認し、活動のアウトプット、初期アウトカム、中期アウトカム、長期アウトカムを、「成果発現までの地図」・「変化の道筋」(セオリーオブチェンジ)として明らかにすることにより、その成果を具体的に検証することとした。

下記図2は、プログラム・コーディネーターと事務局との間でワークショップを重ね整理した、地域密着プログラム全体のセオリーオブチェンジである。文化プログラムの4つの目標を中期アウトカムと設定し、そのうち特に地域密着プログラムの目指す具体的成果を初期アウトカムとして設定した。

図2:地域密着プログラムのセオリーオブチェン



イ. 初期アウトカムの評価基準とルーブリックの設定

図2のセオリーオブチェンジのうち、今回は、特に3つの初期アウトカム(SO1、 SO2、SO3)の達成度合いに焦点を当て、達成度の判断を行う上で以下のような評価基準を設けた。また、その達成度の測定のために、評価基準 1.1、1.2、1.3 においては、(2) アのとおり初期アウトカムのルーブリックを設定し、客観的に価値判断を行えるようにした。

初期アウトカム	初期アウトカムごとの評価基準
1.多様な文化を享受する	評価基準 1.1 各事業の鑑賞者数:事業計画時の見込みと実績値の比較
機会がつくられている	評価基準 1.2 より多くの人が「多様な文化を享受する機会」に参加しやすい工夫の事例の有 無
2.文化・芸術が社会の様々な分野との協働により地域的・社会的課題への対応に生かされている	評価基準 2.1 簡易評価(淡い評価)評価基準①「地域資源・社会課題への対応」の達成度
	評価基準 2.2 文化・芸術が社会の様々な分野との協働により地域的・社会的課題への対応に 生かされている事例の有無
3.文化・芸術の力を知り、 様々な形で文化を支える 活動が増える(作品鑑賞、	評価基準 3.1 各事業を支える関係者数:事業計画時の見込みと実績値の比較
資金提供、運営ボランティア等)	評価基準 3.2 「様々な形で文化を支える活動」が広がっている事例の有無

ウ. アンケート調査とヒアリング調査の実施

ルーブリックによる評価判断を補完するために、団体の成果の発現や地域密着プログラムの支援制度についての強み・弱みについての情報を収集するために、採択団体を対象としたアンケート調査(有効回答数 19 件)と複数年度継続して採択された団体を中心にヒアリング調査(6 件)を実施した。

(2) 評価の結果:評価項目1 プログラムの成果

ア. 評価基準 1.1、2.1、3.1 の達成状況

① ルーブリックによる成果の達成度の検証

評価基準のうち、定量的データを入手できる評価基準 1.1、2.1、3.1 については、ルーブリック(評価基準と尺度によるマトリクス表)を設定し、地域密着プログラムとしての成果の達成度合いの判断を行った。

<初期アウトカムのルーブリック>

初期アウトカム	期アウトカム 評価基準		②ある程度達 成できている 状態	③ほぼ達成で きている状態	④成功している状態 (達成できている状態)
	評価基準 1.1:	事業計画時と	事業計画時と	事業計画時と	事業計画時と
1.多様な文化を享	各事業の鑑賞者	比較して、鑑	比較して、鑑	比較して、鑑	比較して、鑑
受する機会がつ	数:事業計画時	賞者数が増え	賞者数が増え	賞者数が増え	賞者数が増え
くられている	の見込みと実績	た団体数が	た団体数が	た団体数が	た団体数が
	値の比較	30%未満	30%以上	60%以上	80%以上
2.文化・芸術が社	評価基準 2.1:	簡易アセスメ	簡易アセスメ	簡易アセスメ	簡易アセスメ
会の様々な分野	簡易評価(淡い	ントシートの	ントシートの	ントシートの	ントシートの
との協働により 地域的・社会的	評価) 評価基準 ①「地域資源・	評価点「3」	評価点「3」	評価点「3」	評価点「3」
課題への対応に	社会課題への対	以上の団体が	以上の団体が	以上の団体が	以上の団体が
生かされている	応」の達成度	30% 未満	30%以上	60%以上	80%以上
 3.文化・芸術の力	評価基準 3.1:	事業計画時と	事業計画時と	事業計画時と	事業計画時と
	各事業を支える	比較して、関	比較して、関	比較して、関	比較して、関
を知り、様々な	関係者数:事業	係者数が増え	係者数が増え	係者数が増え	係者数が増え
形で文化を支え	計画時の見込み	た団体数が	た団体数が	た団体数が	た団体数が
る活動が増える	と実績値の比較	30%未満	30%以上	60%以上	80%以上

<初期アウトカム評価基準の達成度合い>

初期アウトカム	2019 年度の状況	達成度の評価
1.多様な文化を享受す る機会がつくられてい る	全 19 事業による年間鑑賞者数の推計は、延べ4万6 千人であり、前年度と比較して鑑賞者数が増加した事 業は14団体(74%)であった。	③ほぼ達成できている 状態
2.文化・芸術が社会の様々な分野との協働により地域的・社会的課題への対応に生かされている	全 19 事業の簡易アセスメントシートによる個別評価 (淡い評価)において、「3」以上の水準を達成して いる事業は、9 事業(47%)であった。	②ある程度達成できて いる状態
3.文化・芸術の力を知り、様々な形で文化を 支える活動が増える	全 19 事業の年間関係者数の推計は、延べ 4,600 人で、事前評価時と比較して関係者数が増えた事業は 14 団体(74%)であった。	③ほぼ達成できている 状態

② アンケート調査によるアウトプットの達成度の検証

上記ルーブリックに加え、3つの初期アウトカムの達成度を補完的に検証するために、それを導く 図 2 セオリーオブチェンジのアウトプットの達成度を全 19 団体へのアンケート調査の結果から検証する試みを行った。

アンケート調査では、「各アウトプットに団体の活動がどの程度貢献したか」を設問として、5段階(「大変貢献した」「かなり貢献した」「ある程度貢献した」「あまり貢献していない」「全く貢献し

ていない」「わからない」)で自己評価をしてもらっている。そのうち、「大変貢献した」「かなり貢献した」の割合でアウトプットの達成度を検証した。

*「大変貢 ■ 5. 大変貢献した 献した」「か ■ 4. かなり貢献した なり貢献し ■ 3. ある程度貢献した 初期アウトカム アウトプット た」と回答 ■ 2. あまり貢献してない した団体数 ■ 1. 全く貢献してない 6. わからない 計 1.自由に安心して表現する(発言す 5 3 3 0 13 る、行動するを含む)機会がつくられて (68.4%) 1.多様な文化を享 いる 受する機会がつくら れている1 2.様々な属性(性別、年齢、国籍 2 01 12 等) の人達が交流できる機会がつくら (63.1%) れている 3.県内の潜在的な文化資源・地域資 13 5 10 源・人的資源の再認識、掘り起こしが 2.文化・芸術が社会 (68.4%) 行われている の様々な分野との協 働により地域的・社 4.様々な立場(芸術家、運営者、鑑 会的課題への対応 3 0 10 賞者、地元ボランティア等)で創造活 に生かされている (52.6%) 動に関わる人(担い手)が大勢いる 5.文化の力を活用した地域活性化や 3 3 0 12 3.文化・芸術の力を 課題解決に取り組む団体が多数生ま (63.1%) 知り、様々な形で文 れている 化を支える活動が増 える(作品鑑賞、資 6.文化の力を認識し、これを活用する 1 7 4 0 8 金提供、運営ボラン 様々な担い手間のネットワークが形成 (42.1%)ティア等) され、活性化している 20 10

図 3: セオリーオブチェンジの各アウトプットと団体へのアンケート結果 (n=19)

上記図3からも、アウトプット6以外の全てのアウトプットにおいては「大変貢献した」「かなり貢献した」と回答した団体の割合は半数を越え、逆に「あまり貢献していない」「全く貢献していない」 と回答した団体数は最小限にとどまっている。

イ. 評価基準 1.2、2.2、3.2 の定性的検証

評価基準 1.2、2.2、3.2 については、3 事業を抽出し行った詳細評価(濃い評価)や各団体に対するヒアリング調査において、以下のような初期アウトカムごとの成果の達成度について定性的な事例が確認できた。

初期アウトカム	評価基準	定性的な事例
	評価基準 1.2:よ	・「根洗学園」では、普段アートと接する機会の少ない療育プログ
1	り多くの人が「多	ラムに通う乳幼児とその家族、福祉施設職員にアーティストと触
多様な文化を享受	様な文化を享受	れ合う機会を創出した
する機会がつくら	する機会に」に参	・「クリエイティブサポートレッツ」では、問題行動と呼ばれる行
れている	加しやすい工夫	為も「自分を表す方法としての表現」として「表現未満、」のア
	の事例の有無	ートと捉えている
	評価基準 2.2:濃	・「クリエイティブサポートレッツ」では、社会課題「ソーシャル
2	い評価等を通じ	インクルージョン」に対して、普段障害のある人と交わりを持た
文化・芸術が社会	て得た「文化・芸	ない人に、文化・芸術的アプローチを通じて多様な関わり方を発
の様々な分野との	術が社会の様々	見する機会を用意するなど、社会包摂の実践の場の裾野が広がっ
協働により地域	な分野との協働	ている様子がみられた
的・社会的課題へ	により地域的・社	・「スケラボ」では、商店街やショッピングモールなど、普段は生
の対応に生かされ	会的課題への対	活の場、モノとお金が交換される場にスケラボがパフォーマンス
ている	応にいかされて	を展開することで、賑わいのある場所、幸せを感じる場所にした
	いる」事例の有無	いという事業者の想いを実現する一助になった
3 文化・芸術の力を 知り、様々な形で 文化を支える活動 が増える(作品鑑 賞、資金提供、運営 ボランティア等)	評価基準 3.2:よ り多くの人が 「様々な形で文 化『を』支える活 動」が広がってい る事例の有無	 「クロスメディアしまだ」では、主催者がアーティストと地域住民が交流し、関係を深められるような工夫を行うことによって、 "妖精たち"と呼ばれる地域の住民約20名が、芸術祭の運営に欠かせない地域のサポーターとなり、アーティストへの支援や作品制作への協力などを行っている。 「ふじのくに文教創造ネットワーク」では、教育委員会のサポートが徐々に厚くなっており、新入生の新部員募集の際に「地域部活パレット」を加えるよう学校現場に伝達するなど、部員候補の増加に貢献している。

ウ. 評価項目1:プログラムの成果の評価結果のまとめ

初期アウトカムのルーブリックを活用した評価(評価基準 1.1、2.1、3.1)では、設定された 3 つの初期アウトカムに対して、2 つが「③ほぼ達成している状態」、1 つが「②ある程度達成している状態」であり、そのアウトプットに関する団体の自己評価や 3 つのプログラムの詳細評価による定性的な実績(評価基準 1.2、2.2、3.2)においても、それを裏付ける評価が得られた。

これらの結果から、設定された3つの初期アウトカムに対して、総じて「ほぼ達成できている状態」であり、全体として、地域密着プログラムとして目指した状態に近づきつつあると評価できる。

(3) 評価の結果:評価項目2 手段の妥当性

「地域密着プログラム」では、静岡県文化プログラムのテーマである「地域とアートが共鳴する」のとおり、文化・芸術の社会的役割に着眼している。文化・芸術そのものの振興を目的に実施される文化プログラムも多い中で、そこにとどまらず、支援する文化・芸術事業が他分野(観光、ものづくり、産業、福祉、医療、教育、子育て、ソーシャル・インクルージョン、地域振興・まちづくり、防

災・災害復興等)との協働を通じて、いかに地域あるいは社会の課題解決や地域資源の活用において新たな価値を創造できるかを重要視している。

このような背景を踏まえ、地域密着プログラムの文脈においての手段の妥当性、即ち地域的・社会的課題解決や地域資源の活用のために事業を支援するというアプローチの価値は何だったのか改めて検証した。以下、3つの価値が浮き彫りとなった。

ア. 価値1:創造的な課題解決手段の提供

まず、1点目として、文化・芸術事業は、既存の課題解決手段が存在しない、あるいは手詰まりな状況の下で、以下のとおり、新たな創造的な視点を提供していることが認められる。

- ・「かけがわ茶エンナーレ」においては、観光を含めた地域振興・お茶産業の振興の方法において次の手が見えなかったときに、芸術祭としての茶エンナーレを開催し始めてから、地域の観光地やお茶文化の価値がアーティストを介することによって再発見され、市民全般の文化への関心度も高まっていった。
- ・「熱海ふれあい作業所」※や「クリエイティブサポートレッツ」においては、障がい福祉制度の中の障がい者就労施設という役割を担いながら、福祉の制度内ではかなえられない利用者の個々の表現や、個人の夢を支えることを、文化・芸術事業で補完することで実現させた。
- ・「ふじのくに文教創造ネットワーク」の地域部活事業においては、公立中学校での文化系部活の選択肢が限定的であるという教育制度内の課題に対し、地域レベルで部活動を展開するという解決策を実現させ、全国に先駆けて新たな文化系部活動の在り方を提示している。
- ・松崎町「絲」コンセプト※は、町内の人口減少と少子高齢化の流れを食い止め、産業振興や観光業を推進するための好循環をつくるための「キッカケ」も見えないことが地域課題であった。分かりやすい解決策が見えない中、地域に存在する様々な資源を文化・芸術的視点から発掘していくことによって新たな魅力を地域住民が発見していく過程を事業化した。
- ・根洗学園では療育の現場を知ってもらうための試みとして、俳優達に学園の日常を演じてもらい映像を制作。俳優たちの演技を通じ、保育士等の技術の高さが可視化され、現場の誇りの醸成にもつながった。

※2019 年度以前の採択団体による事業であるが、特に創造性の高い課題解決手段を提案していたのでここで例示した。

イ. 価値2:社会関係資本の蓄積の促進

2点目として、文化・芸術事業が、「信頼」や「ネットワーク」といった社会関係資本の蓄積を促進させていることが挙げられる。

文化・芸術的活動には、アートを基点にして、多様な属性の人々を同じ「体験」でつなぎ、対話を促進させる触媒となる点が認められる。また、アーティストによる「創造的な視点」を導入することによって、それを鑑賞する側の視野が広がり、他者への寛容性が高まるということも期待される。

具体的な成果は、以下のとおりである。

- ・「クリエイティブサポートレッツ」においては、福祉の世界にとどまらず、文化・芸術的アプローチを取ったことによって、広く門戸を開け、地域内外の様々な領域の関係者と強いネットワークを構築し、社会包摂に向けての具体的な一手として提示することができた。
- ・「富士の山ビエンナーレ」においては、平成の合併で分断されてしまったエリアを中心に活動しており、 地縁や住民間の関係性を保つことを目指し、現代アートによる芸術祭を開催することにより、地域間の 連携強化や地域資源(歴史建造物や観光地)の再活用に成功した。
- ・「Scale Laboratory(スケラボ)」においては、この活動がなければ出会う事のなかった人たちがつながることで、地域に、アーティストやアートに関心の高い人たちのコミュニティが形成され、さらにその周辺の人にもつながりが拡大している。スケラボが創造する価値観が、企画への参加や協力を通じて多様な人たちにも共有されている。

ウ. 価値3:地域社会における変化の促進

最後に、文化・芸術事業は全ての人に均一に変化をもたらすことはできないが、そこに本質的価値 を感じた人への影響は大きく、変化をもたらしやすい点がある。

「地域密着プログラム」の採択団体に、活動する地域社会で事業実施をきっかけに変化が起きたかという質問でアンケート調査をしたところ、多くの団体がそれぞれの地域である程度の変化が起きたと回答した。

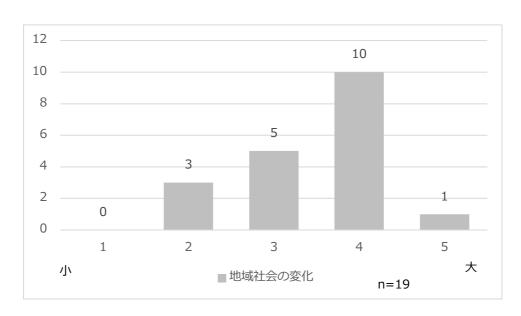


図 4:アンケート結果からみえる地域社会における変化(n=19)

上記図4のような地域社会の変化の具体的な変化の内容についての定性分析を行ったところ以下のような内容が挙げられた。

① 住民の創造活動への参加度が増えた

プログラムへの参加者の輪が広がった、人材が入れ替わりながら違う層の参加者が増えたなど

② 住民間の新しいコミュニティの形成が見られた

活動拠点ごとに閉じていた活動が横に広がった、活動を重ねることで事業に関係ないところで住民 同士のつながりが生まれた など

③ 新たな地域のステークホルダーの参画が生まれた

今まで関係性が薄かった行政や地元企業、有力者が団体の活動に関心と理解を持って協力をしてくれるようになったなど

もう少し詳しく地域での変化の起こり方をみるために、クロスメディアしまだの UNMANNED 無人駅の芸術祭の事例を濃い評価結果をもとに表す。

クロスメディアしまだ: UNMANNED 無人駅の芸術祭を通じての地域の変化

2019 年度で無人駅芸術祭の3回目の開催となる。2017 年度のこの事業が始まる前は、地域の人たちの中で文化・芸術に関わりを持っていなかった人々が大多数だった。その中で、特に地域での変化の中核となったのが、"妖精"と呼ばれている芸術祭の運営サポート全般を行う地域の人々だった。彼らの意識や価値観の変化は大きく、3年たった現在、"妖精"たちが自らのアート論を語るようになる例も多くあったという。またアーティストの制作活動をサポートしたりして、「地域住民の協力なしでは作品制作や作品の着想を得ることすら出来なかった」と語るアーティストもいた。このような地域の変化を推進している"妖精"たちは3年目に20名まで増えた。この数は地域の全人口に対しても影響力のある人数であり、彼らの口コミにより地域内で更に影響を受ける人たち(家族やご近所など)も多い。また"妖精"たちの人数も口コミなどで年々増えており、さらに地域の中には"妖精"の予備軍も多くいるという。 "妖精"のような人たちが出てくるエリアも増えたという。

もう一つの地域の変化として、地域住民がおもてなしの心を持って外部者とコミュニケーションが取るようになった。特に主催者からの報告によると、芸術祭の参加者に対して地域住民は、お茶をもてなしたり、無人駅にお客さんが電車で到着すると旗を持って出迎えたり、進んで自分の敷地の駐車場を貸し出す住民が現れたり、地域住民が芸術祭とは関係のないお地蔵さんを勝手に設置したり、本数の少ない電車での移動が不便だからといって率先して車で送迎する住民まで現れたという。地域住民によるおもてなしの方法は様々であるが、芸術祭に対し「自分事」として主体性が高まっている現れであり、芸術祭そのものが地域に支えられながら継続できる基盤が整ってきた。

エ.評価項目2:手段の妥当性の評価結果のまとめ

以上、創造的な課題解決手段の提供、社会関係資本の充実、地域社会での変化の推進の3つの観点 (価値)から、「地域密着プログラム」における文化・芸術の力を活用するアプローチは、手段とし ての有効性が高いことが確認できた。

(4) 評価の結果:評価項目3 支援制度の検証

ア. 地域密着プログラムの特徴

「地域密着プログラム」の支援制度としての特徴は、事業継続を前提とした助成制度とプログラム・コーディネーター等による伴走支援である。

(1) ウで述べた 19 団体へのアンケート調査において、各団体の成果達成度合いに対して、地域密着プログラムによる支援がどの程度有用だったか質問した。

結果は、「助成金の支給」に対して 18 団体 (94.7%) が、「プログラム・コーディネーターによる事業に関する提案やサポート」に対して 15 団体 (78.9%) が「大変役に立った」「ある程度役に立った」と回答している。

地域密着プログラムの主たる手段が、成果実現に役立ったと高く評価されていることが判明した。

更に、具体的な強みについて、同アンケート調査で、他の助成プログラムとの比較のもとに、地域密 着プログラムの比較優位性を採択団体に質問したところ、以下の結果となった。

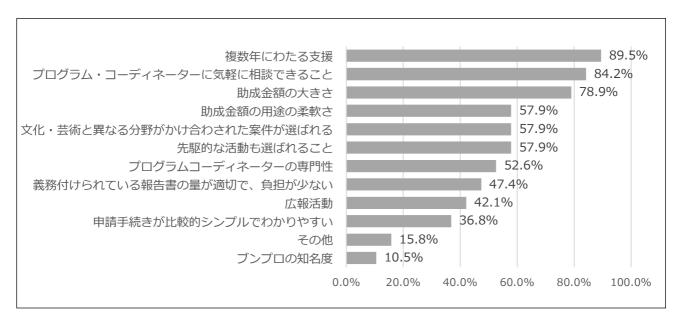


図 5:地域密着プログラムの比較優位性(複数回答、n=19)

- i. 「複数年にわたる支援」(89.5%)
- ii. 「プログラム・コーディネーターに気軽に相談できること」(84,2%)
- iii.「助成金額の大きさ」(78.9%)

これらの要素は、地域密着プログラムを特徴付けるものでもあり、プログラム・コーディネーターによる伴走支援、事業継続を前提とした助成制度など、意図的に支援制度に盛り込んだ指針が、採択団体においてもきちんと価値が見出され、高く評価されていることが分かった。団体側のニーズを鑑みて、地域密着プログラムの支援制度の適切性は高いと結論づけられる。

前述のアンケートの結果を踏まえ、地域密着プログラムの強みを少し俯瞰して探ると以下、 2 点が 強みとして浮き彫りとなった。

① プログラム・コーディネーターの役割

地域密着プログラムは、社会の様々な分野の担い手が実施する取組を支援する制度であり、担い手である団体側にアートの専門性を求めていない。むしろ、事業のきっかけとなったアイデアや視点の「先駆性」、文化・芸術の力を生かした「創造性」などを大切にしており²、特に審査時において案件を採択する上での重要な視点である。もう一方で、これは文化・芸術分野に限らないが、先駆的あるいは創造的な試みは、事業内容や安定した実施体制を構築するのが難しいという矛盾も抱えている。既存の枠組みにとらわれない先駆的で創造的な活動であればあるほど、その価値の言語化・具体化が困難であったり、実践に試行錯誤が伴ったり、関係者の理解や協力が進まなかったり、実際の効果発現まで時間がかかるうえ、いつ発現するかの予測さえ立てにくいからである。即ち「事業の有効性」と支援制度の価値観の中心にある「創造性」や「先駆性」を両立させることは容易ではない。しかしこの両立を実現させることとであり、この実現に向けて支援していくのが、プログラムのアウトカムの達成を促進させることとなり、この実現に向けて支援していくのが、プログラム・コーディネーターの大切な役割である。

② 複数年度支援を想定した制度設計

地域密着プログラムのもう一つの強みとして挙げられるのは、複数年度の支援を想定した支援制度の設計にある。毎年の募集要項のプログラムのねらいにも掲げているとおり、「これまでは実現が難しかったプログラムに、長期的な視野をもって取り組む機会」としてとらえられるよう応募団体にアピールしている。このような姿勢の背景には、先駆性・創造性が高いプログラムは、事業としての芽が出て実際成果が可視化されるところこまでいくのには長期的な取組が必要という認識と、そのような事業を支援することに価値をおいている設計側の意図が感じられる。団体としても、単年度ごとにまとまった活動群ではなく、年度を越えた中長期的展望に基づく事業計画を立てることで、新しいことを試したり、実施手段を工夫したり、仲間を集ったりする余力も生まれ事業効果を促進させる可能性が高まる。

イ. 地域密着プログラムの課題と今後の方向性

地域密着プログラムの評価調査の一環として、アーツカウンシル設置に向けた支援制度の改善点を 把握するために、(1) ウのアンケート調査・ヒアリング調査から採択団体の期待・ニーズを抽出し、 課題の整理を実施した。

また、評価調査においては補足的になるが、それら課題を解決するための方向性について、プログラム・コーディネーターの意見などを集約してまとめを行なった。今後の方向性の取りまとめは、評価チームは介在せず、事務局が主導して、適宜コーディネーターの意見を聞きながらまとめを行なった。

2 募集要項には「既存事業ではなく新たな取組みであること(2017 年度、2018 年度)」と明記し、「先進性」「独創性」を選考の視点として挙げている。

支援制度における課題を団体からの期待・ニーズの観点から、以下のようにまとめた。

支援制度の課題 (団体からの期待・ニーズ)	助成先団体からの意見の例		
(1) 応募団体の事業ステージに あわせた支援メニューの拡 張	・自己資金のない団体は応募しにくく、実績のある団体と比較審査されることに不安を感じる。スタートアップを支えるような支援枠があると良い。 ・単年度内に募集・採択から実施までが行なわれる場合、事業実施期間は実質9ヶ月程度に限られてしまう。事業計画は、本番の半年から1年前には立て、関係者とのスケジュール調整を行なうことから、複数年の助成制度もあると有難い。		
(2) 団体同士のネットワーキン グ機能の充実	 ・採択されたことにより団体間の横のつながりができたため、団体内で閉鎖的にならず、他の団体から情報やアドバイスをしてもらったり、相乗効果でより良いものを目指すことが出来た。 ・採択されたことで社会的信用が高まり、関係者への協力が得られやすくなった。 ・地域を巻き込み、地域に根付いた事業とすることは一団体だけでは達成が難しく、市町の協力が必要である。 		
(3) プログラム・コーディネー ターによる専門的な支援	 ・各団体のレベルに合わせたアドバイスをしてもらえるため、団体の企画・実施能力の向上につながり大変心強い。 ・活動と並走してくれるコーディネーターや他の採択団体との交流により活動の視点をより高く持つことができた。 ・コーディネーターの存在は、静岡県文化プログラムの特徴でもあり、効果も大きいと思う。 ・担当する団体に関わらず専門分野を活かした支援もしてもらえると良い。 		
(4) 広報・情報発信に関する 支援	・活動を推進しながら情報発信をすることに困難さを感じている。・広報で成功した団体の事例等を紹介するなどの支援があると良い。・先進事例となり得るプログラムについては、支援の取組による貢献度が高いことを内外に発信してほしい。		
(5) 長期的な成果を生み出す ための支援制度の充実	 ・採択されたプログラムが、5年、10年、20年後にどのように地域の中に根付き、文化の力で地域が抱える諸課題に寄与しているかを継続的に観察し、必要に応じた支援などをしてほしい。 ・試行錯誤をしながらも継続していける環境づくりと試行錯誤に付き合える場・セクションを設置してほしい。 ・支援制度をより良いものにするため、団体の率直な意見を伝える仕組みがあると良い。 		

団体からの期待・ニーズに対して、それに応えるための課題を、以下のように整理した。

支援制度の課題 (団体からの期待・二一ズ)	課題の解決のための新たな方向性
(1) 応募団体の事業ステージに合わせた 支援メニューの充実	県内の団体ニーズに合わせた柔軟な支援メニューの設計と 運用を行うこと
(2) 団体同士のネットワーキング機能の 充実	情報共有やそれによる活動の相乗効果を生み出すためのコ ーディネートを行うこと
(3) プログラム・コーディネーターによる 専門的な支援	プログラム・コーディネーターによる伴走支援を行い、団体 の活動状況のモニタリングや、団体の知見を補うこと
(4) 広報・情報発信に関する支援	団体に対して、広報に関する体系的な知見の提供やサポート を行うこと
(5) 長期的な成果を生み出すための 支援制度の充実	長期的な成果を定義して、地域課題の把握や相談対応のための環境整備を行うこと

上記で整理した課題の解決のための方向性をまとめると、以下のようになる。

① 県内の団体ニーズに合わせた柔軟な支援メニューの設計と運用

応募団体の事業ステージにあわせた支援メニューの充実が求められており、例えば事業のスタートアップを支援する少額の助成制度の設計等を工夫していく必要があると考える。2020年度の地域密着プログラムからは、前年度内に募集・採択が行なわれるようなプロセスの改善を図り、4月から翌年3月までの事業実施が可能となった。今後も、団体ニーズに合わせた柔軟で効果的な助成制度を検討する必要がある。

同時に、19事業を対象とした簡易評価から読み取れることは、資金面や人材面の自立化を促進するための、運営や人材育成についての支援の必要性である。

② 情報共有やそれによる活動の相乗効果を生み出すためのコーディネートを行うこと

広報や資金調達など、各団体に共通する課題について情報交換を行ったり、知見を共有することは 団体にとって非常に大切であるため、団体間交流を促進する機会をできる限り設ける必要がある。 また、支援制度は、まちづくり、福祉、教育、観光、産業など、社会の様々な分野の担い手による文 化・芸術の力を活用した創造的な取組を促進し、地域の活性化を目指すものであるから、行政にお いても文化行政所管課のみならず、関係課の理解や協力が求められる。アーツカウンシルにおいて も、市町や企業等との接点を設け、連携の輪を広げていくことが必要である。

③ プログラム・コーディネーターによる伴走支援を行い、団体の活動状況のモニタリングや、団体の知見を補うこと

これまでは年度当初に団体ごとに担当コーディネーターを決めて、1年間通して伴走支援を行なってきたが、団体により支援内容のニーズ等が異なることがわかってきたため、団体の実情に応じ、チーム制を導入するなど柔軟な支援方法を検討する必要がある。

またコーディネーターの個人的スキルに頼ることによる弊害が生じないよう、コーディネーター同士が連携して各団体の支援方針を立て、進捗状況等を随時確認・共有することが重要である。

支援制度の目的やコーディネーターの役割などについて、これまで以上に団体に対して丁寧な説明を行う機会を設けるとともに、採択に関わらない第三者の協力を得るなどして団体が意見を述べやすい仕組みを検討することが求められる。

④ 団体に対して、広報に関する体系的な知見の提供やサポートを行うこと

団体が地域での活動を効果的に実施する上で重要な広報活動を支援するため、より体系的な知見の 提供やサポート行う。例えば、団体向けの「広報戦略の立て方」等の勉強会の実施や、アートプロジェクトを介した地域づくり等の観点で発信力のある講師の招聘など、広報に資するネットワークの 充実を図ることが求められる。

イベント等の告知については、報道機関への情報提供やホームページ、SNS での発信等を中心に側面支援しており、コーディネーターや事務局への早めの情報提供を団体に周知する必要がある。

事業の価値を知ってもらうための広報は、事業や支援制度の意義を説明し、支援の輪を広げていく ことにもつながるため、アーツカウンシルとしても積極的に行なっていく必要がある。そのために はプログラムの鑑賞者数や関係者数などの基礎的なデータを収集し、分析の精度を高める必要があ り、採択団体の理解と協力が不可欠である。

⑤ 長期的な成果を定義して、地域課題の把握や相談対応のための環境整備を行うこと

アーツカウンシルを設置した際には、採択団体に限らず、文化・芸術の力を活かした取組を地域で行なおうとする人々等が気軽に相談できる環境づくりが求められる。

また、地域密着プログラムとして採択した事業のその後の状況など、地域が抱える課題や文化芸術の状況を常に把握し、その事業のインパクトを継続して高めていくためにも必要な施策や支援制度を柔軟に講じることが必要である。

地域密着プログラムは、イベント本番だけでなく団体の日々の試行錯誤を大切にし、日常の中での 創造活動を可視化することを目指してきた。こうした姿勢をアーツカウンシルに継承し発展させて いくことが長期的成果を発現させるためにも重要であると考える。

(5) 全体評価の結果のまとめ

本評価を通じて地域密着プログラムは、設定された3つの初期アウトカムにおいては、総じて「概ね達成している状態」であることが確認できたため、プログラムとして目指した状態に近づきつつある状況にある。また、詳細評価(濃い評価)の結果からも採択された事業が、地域において多岐にわたる価値を生み出し、事業効果をあげていることが確認された。

創造的な課題解決手段の提供、社会関係資本の促進、地域社会での変化の推進の3つの観点から、 文化・芸術の力を活用したアプローチは、様々な地域的あるいは社会的課題解決や地域資源の活用 を進める上での手段としての妥当性は高く、文化・芸術的アプローチだからこそ達成できたという 成果が多く確認できた。

地域密着プログラムの支援制度としての強みは、事業の「先駆性」「創造性」そして「有効性」を担保し、アウトカム発現に貢献しようと努めているプログラム・コーディネーターの存在が挙げられる。また、複数年度の支援を想定した制度設計も強みの一つとして挙げられる。もう一方で支援団体からの期待やニーズから浮き彫りとなった課題も今回の評価を機に整理され、2020年度以降のアーツカウンシル設置に向けての支援制度の改善点も把握した。

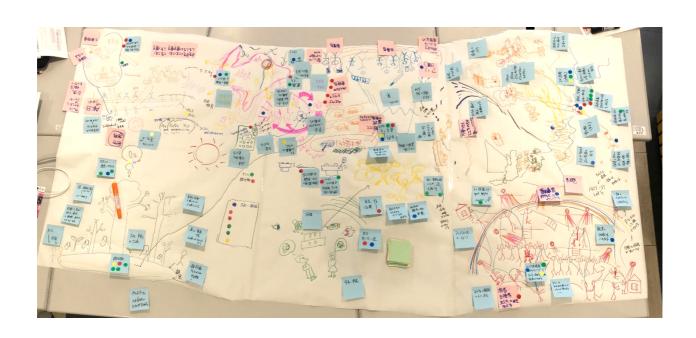
(6) アーツカウンシルに向けて

今回の評価は、評価が困難とされている文化・芸術分野の活動を対象とした評価手法の実践を試みたものである。評価結果から読み取れることは、文化・芸術的アプローチが、地域社会の課題解決に十分に資するものであること、支援の仕組みが有効であったことなどがある。一方、課題としては、長期的にプログラムが継続していくための運営や人材育成に対する支援が挙げられる。これを起点にアーツカウンシルに移行しても、日々進化する評価の実践を通じ、地域のより豊かな創造活動に寄与していくことが望まれる。

添付資料 1 評価ツールの紹介:簡易評価アセスメントシート (淡い評価)

地域密着プログラムにおいて評価を導入する際一番の難題が、文化・芸術×地域の視点で実施されている多彩なプログラムを、いかに横断的に評価するか、評価基準をいかに設置するか、数値等で表しづらい事業成果の発現程度を、何をもってよしと判断できるのか、という点であった。この難題に取り組むため、評価チームは評価のものさしづくりをプログラム・コーディネーターと事務局とともに、2018 年度から取組み、2019 年度においては、新しい評価ツールとして簡易評価アセスメントシートを活用した評価を試行し、本評価にもその結果を適用した。

簡易評価アセスメントシート作成の起点となったのが、事務局とプログラム・コーディネーター対象に行ったサクセス・ビジョン・ワークショップ(2018 年 11 月)の結果である。ここでは、地域密着プログラムとしてのサクセス(成功している姿)を描いてもらい、ブンプロ固有の価値観やプログラムの実施において大切にしてきたことを顕在化し、それをもとに評価基準を作成するという手順を踏んだ。



2018 年度に作成した評価基準を基に下記に示す簡易評価アセスメントシートを作成し、2019 年度の採択団体に対し、年度当初と年度末の計 2 回評価を実施した。1 回目は、採択団体とプログラム・コーディネーターとの合同評価、2 回目は、採択団体の自己評価とプログラム・コーディネーターの評価それぞれ行なった。以下、本評価に際し、活用した簡易評価アセスメントシートと、2020 年度用に改訂したものを示す。

簡易評価アセスメントシート (2019 年度版)

間勿	易評価アセスメントシート		(2019 年度版)			
No.	評価基準	評価基準の定義	①全く達成できていない状態	②少し達成できている 状態	③概ね達成できている 状態	④成功している状態 (達成できている状態)
1	多様性と 包摂性	全ての人が潜在的に表現者 や文化の担い手あるという ことを前提に、対象事業 に、多様な人たちの可能 を引き出す工夫・仕組みが みられるかということ。	助成先団体が多様性へ の関心がない。事業実 施者や対象者が画一的 である。	事業を実施する中で、より 多くの人、または多様な人 を巻き込むことに団体が関 心をもっている。事業に は、多様な人が表現者や 化の担い手として参加・表 現できるよう配慮されてい る状態。	「誰でも潜在的な表現者・文化の担い手」との認識から、より多くの人、おりを付かれている。 多様な人を巻き込むことの。 事業の中で、より多くの人、またはを関係な人を表現をしている。 本または多様な人が表現。 者や文化の担い手として事業に参加・表別多く設けられている状態。	「誰でも潜在的な表現者・文化の担い手」にすることが団体の ミッションであり、事業者、取 り上げる人材やその家族、支援 者)と参加者(観客、鑑賞者、 地域住民など)全てに多様性が ある。実際にやっている人だけ でなく、支援者や観客(事業に 触れた人)も表現者や文化の担い手として輝いている状態。
2	革新性と 適応性	事業を実施する前提に、既存の文化芸術活動や地域や社会課題のとらえたいる。 現状」へ疑問チンス疑問チを間が、より良いアプラをでしていること。また、自現体はのでいます。 活動においても、現状社会にはいるできない。 活動においてもなく、して改善・変化を生みだしていると勢が事業に反映されている。	たず、また社会的状況 への配慮や、探究心が	事業が、自団体の活動を含む既存の文化芸術活動の固定のでは、あるいは地域や社会課題の既存のとらえ方などにおいて、「現状」に疑問を投げかけ、新たなアプローチを模索している状態。	事業が、自団体の活動を含む既存の文化芸術活動の固定概念において、あるいは地域や社会課題の既存のとらえ方などにおいて、「現状」を打開するため、新たなアプローチを試行錯誤しながら、実績が蓄積されている状態。	事業は常に社会状況などについて研究する探究心があり、その状況についての分析や把握ができている。また、文化芸術活動の刷新や地域や社会の課題の新たなとらえ方において明確なビジョンを掲げながらも、批判的思考を怠らず、絶えず変化を遂げながら、成果を挙げている状態。
3	自立発展性 注 1	団体が、経済面、人材面、 企画運営面などで自立して いる状況で事業を実施でき ている状態を確認すること によって、助成期間後の事 業の自立発展性をみること。	思いがあるけど、思いを遂げる方法がわからない/ない (人、お金、手段等)。遂げたいことの思想すら周囲の関係者に届いていない、あるいは認められていない状態。	団体が、財政面、人材面、 企画運営面のいずれかの一 つの基盤は強いが、他の二 つにおいては、まだ脆弱な 状態。	団体が、財政面、人材面、 企画運営面の3方面におい てある程度基盤が安定して いるが、新たな資源(人、 資金、手段等)の獲得には 苦戦している状態。	経済的にも、人材的にも、企画 運営するにあたっても自分たち できている状態。)。もっと進 化してもいい(思想の進化、唯 一無二、そういうことがキチン と言えて、周囲が聞いてくれる ようになる状態、その養分を自 分たちで見つけられる、自分で 変化できる状態。
3 a	財政面の 自立発展性	団体が、財政面で自立し多 様な状態で事業を実施でき ていること。	財政的には、静岡文化 プログラムの助成金以 外の収入がない状態。	財政的には、文化プログラ ムの助成金を含む二つ以上 の財源をもっているが、ま だ財政基盤がぜい弱な状態。	財政的には、一つの財源に 依存することなく、各団体 の最適な収入ボートフォリ オに到達しつつあるが、次 年度以降については(助成 期間後については)収入の 見通しがたっていない状態。	財政的には、一つの財源に依存 することなく、各団体の最適な 収入ポートフォリオが組めてい て、今後とも持続できる見通し がある状態。
3 b	人材面の 自立発展性	団体が、人材面で自立した 状態で事業を実施できてい ること。	事業を率いるリーダー はいるが、リーダー以 外の人員が確保できて いない状態。	事業を率いるリーダーおよび中核となるスタッフが数 をいるが、ビジョンが内部 で共有されておらず、必要 な人員が量的にも質的にも 確保できていないため、事 業を狭窄している状態。	事業を率いるリーダーおよび中核となるスタッフが数名おり、ビジョンが広く共有されている。また人材が不足している場合は、その時々に外部から必要な人材を獲得したり、賛同者からの支援を集めたりすることができる状態。	ビジョンをもっているリーダー およびそのビジョンを共有した 中核となるスタッフが数名い る。事業が円滑に実施するだけ の人材が人数的にも質的にも確 保されている状態。
3 c	企画運営面 の自立発展 性	団体が、企画運営面で自立 した状態で事業を実施でき ていること。	自分たちの思いややり たいことを「事業」と いう形に企画し、かつ 運営できない状態。	事業の企画は描けるが、い ざ実施段階で連用のキャパ シティが不足している状態、あるいは、事業の連用 はできるが、それを事前に 計画という形でまとめられ ない状態。	自分たちの思いややりたい ことを、「事業」という計画 におとし、かつ事業の運用 もできている状態。	自分たちの思いややりたいことを、「事業」という計画におとし、かつ事業の運用もできて、更に自分たちの事業の成果を根拠をもって把握し、事業の改善に反映したり、関係者に対して広く発信できる状態。
4	地域資源・ 社会課題へ の対応 注 2	事業が、文化芸術分野を超 えて、文化活動を通じて地 域資源や社会課題を顕在化 し、地域の魅力・可能性や 社会課題のとらえ方を発見 /再発見/再定義したり、 地域活性化の糸口をみつけ るきっかけを提供している こと。	事業が対応する地域 の、潜在的な地域資源 や社会課題を見っけ出 すことができず、活動 がただ活動のために行 われている状態。	事業が対応する地域の、潜 在的な地域資源の発掘や社 会課題の顕在化に貢献しよ うとしているが、そのとら え方や実施手段において試 行錯誤している状態。	事業が、潜在的な地域資源 の発掘や社会課題を顕在化 することに成功しつつある が、事業の成果が一部の関 係者にしか把握されていな い。	事業が、潜在的な地域資源の発掘や社会課題を顕在化することにおいて成功しつつあり、様々な関係者を多角的に巻き込みながら、事業効果の拡大を図っている。
5	伝えるカ	団体がどのようなきっかけ をもとに思いをもって、い かなる事業を目指している のか、一貫性をもって伝え られていること。	示している問題意識や 目指すところと乖離し	事業の内容が、団体の提示している問題意識や目指すところとある程度一貫性がみられるが、事業の設計や目指す成果が戦略的に整理されていないため、身づの関係者以外が把握しづらい状態。	事業の内容が、団体の提示している問題意識や目指すところとの一貫性がみられ、事業の設計や目指す成果は戦略的に整理されつつあるが、あまりそのことが外部へと発信されていない状態。	事業の内容が、団体の提示している問題意識や目指すところとの一貫性がみられ、事業の設計や目指す成果は戦略的に整理されており、外部へも積極的に発信している状態。
6	事業の波及 効果 注3	一過性のイベントに頼らず、2020年以降を視野に入れた持続的な展開が期待されるような事業であること。事業の対象地域、あるいは対象としているグループ以外での展開が期待できる事業であること。	ない状態。あるいは、	事業からの波及効果は複数 みられたが、他者への触発 や飛び火が実際に進んだか 確認できない状態。	事業からの波及効果はあらゆる面で確認でき、かつ他者への触発や飛び火が進んでいるが、その根拠となる材料があまり把握できない状態。	事業からの波及効果はあらゆる 面で確認でき、かつ他者への触 発や飛び火が多方面でみられ る。またその根拠となる材料が 体系的に集まっている状態。

- 注1 自立性の基準は3、事業が、提案プログラムの助成期間が完了したあとでも、自立して発展していく可能性を、団体運営基盤の3つの側面から推測しようという 視点である。基準3は3a,3b,3cの3つの側面がそれぞれ合わさって、複合指標を構成している。運用方法としては、3a,3b,3cの結果を最初にまとめたあと、複合 指標としての基準3で総合判断をする運びとなる。
- 注 2 基準4の「潜在的な地域資源の発掘や社会課題を顕在化することに成功しつつある」こととは、団体のその年度内に行った活動を計画どおり実施できたか否かという判断というよりは、より長期的な目標(アウトカム)達成に対しての進捗レベルについての判断であるべきである。
- 注3 基準4と基準6の違いは、特に事業が予測した効果においての時間軸の違いである。基準4は事業実施期間中に発現される効果に着眼しているのに対し、基準6はより長期的な課題解決や関係者の変化にどの程度貢献しているか、見通しをたてながら検証する基準である。もう一つの違いは、基準4が事業の計画の範囲である受益者や担い手側の参加者に焦点をしばって変化(事業の責任の範囲)をみるのに対し、基準6は計画に関係なく事業の影響をうける立場にいる関係者全員がその対象となる。配慮すべき点として、特に芸術・文化分野の事業の波及効果の広がり方を予測するのは難しく、他の事業や社会要因の影響も差別化できない。この困難な状況をうけとめつつ、柔軟でかつ時間軸にしばられない方法で、基準6のためのデータ集めのための活動を事業の中に組み込むことも一案である。

簡易評価アセスメントシート < 2020 年度版>

No.	評価基準	評価基準の定義	②全く達成できてい ない状態	②少し達成できてい る状態	③概ね達成できてい る状態	④成功している状態 (達成できている状態)
1	事業に関わる人の多様性	事業の実施者および関係者や 参加者の間に多様性がみられる状態。 (事業が目指すべき「多様 性」の定義については、実施 団体と PC が相談のうえ一緒 に決定する。)	多様性に関心がない、または画一的である。	多様性に関心を持っ ているが、まだ実現 できていない。	価値を感じており、 ある程度多様性がみ られる。	事業の実施者、事業における 主人公(出演者、取り上げる 人材やその家族、支援者)、 参加者(観客、鑑賞者、地域 住民など)の顔ぶれに多様性 を持たせることに価値を見出 しており、その状態をつくり だすことに成功している。
2	包摂的な仕 組み・包摂 に向けたエ 夫	「誰もが表現者・文化の担い 手」との認識から、創造活動 に関心のない人、関わる機会 が少ない人、関わりたいけれ ど手段がない人にも、参加で きるきっかけ、仕組み、工夫 が事業に取り入れられている 状態。	創造活動に参加でき る仕組みや工夫に配 慮がない。	仕組みや工夫に配慮 はしているが、あま り結果につながって いない。	さまざまな人が参加 できる仕組みや工夫 が事業に取り入れら れ、結果につながっ ている。	「誰もが表現者・文化の担い 手」との認識から、事業の中 で、より多様な人が表現者・ 文化の担い手として事業に参 加・表現できる仕組み、工夫 が積極的に数多く設けられて いて、みんながそれぞれ輝い てる。
3	事業をめぐる新陳代謝	団体が、既存の文化・芸術活動、あるいはテーマとする地域や社会課題の「現状」へ疑問を投げかけ、その発展に寄与しようとしている。また、自団体の活動においても現状維持に甘んじることなく、客観的な視点を持ち、社会情勢や環境に対応しながら、常に事業を改善させることができている状態。	「現状」に疑問をもたない。社会情勢についても関心がない。 自分たちがやっていることを対象化/客観視できず、改善の必要性を感じていない。	新たなアプローチを 模索している。 事業改善点を模索し ている。	新たなアプローチを 試行しながら、改善 などの結果が実績と して蓄積され始めて いる。	社会状況の客観的な分析と把握ができている。また、文化・芸術活動の発展、地域や社会課題の将来に向けて、明確なビジョンを掲げながらも、批評的思考を怠らず、絶えず試行錯誤をしながら最善のアプローチを選択できている。
4	自立発展性	団体が、経済面、人材面、企 画運営面などで自立している 状況で事業を実施できている 状態を確認することによっ て、助成期間後も事業の自立 発展性をみることができる状態。	思いがあるけど、思いを遂げる方法がわからないがい(人、お金、手段等)。遂げたいことの思想すら周囲の関係者に届いていない、あるいは認められていない。	団体が、財政面、人 材面、企画運営面の いずれかの一つの基 盤は強いが、他の二 つにおいては、まだ 脆弱である。	団体が、財政面、人 材面、企画運営面の 全てにおいてある程 度基盤が安定してい るが、新たな資源 (人、お金、手段 等)の獲得には苦戦 している。	財政面、人材面、企画運営面において自分たちで全てできている。 事業の思想や、事業が唯一無二であることについて語ることができ、周囲が聞いてくれるようになる状態。養分を自分たちで見つけられる、自分たちで変化することができる。
5	事業の地域 資源・社会 課題への対 応度合い	創造活動を通して、地域資源 や社会課題を顕在化していた り、地域の魅力の可能性や社 会課題を見つけるきっかけの 提供がなされており、それら を含む団体のビジョン・ミッ ション・価値が周囲に伝えら れ、理解されている状態。	活動実施自体が目的となっており、地域との連動が見られない。	試行錯誤している。 事業の価値が外から の賛同を十分に得ら れていない。	限定的であるが効果 をあげている。 事業の価値が伝わり 始めている。	潜在的な地域資源の発掘や、社会課題の顕在化を進める過程で、事業の存在が確実に効果につながっている。また、事業の価値を広く多角的に発信できており、事業における主人公(出演者、取り上げる人材やその家族、支援者)、参加者(観客、鑑賞者、地域住民など)から賛同を得られている。
6	事業の波及 効果	A)事業の効果が対象地域 (もしくは分野)に浸透し、 一時の盛り上がり等ではな く、そこに根付いて様々な変 化につながっている状態。 B)事業の影響が、対象地域 やグループ以外へも広がり (触発・飛び火)、様々な自 発的な展開や変化につながっ ている状態。	A)、B)を期待する ことができない。	A) の兆候は見える が、B) は確認できな い。	A)の変化を起こしつ つあり、B)について もいくつかの事例が 確認できる。	事業効果が地域に深く浸透していて、地域で革新的な変化を起こしている。また他地域、他グループへの影響も大きく、その影響力が全国的に確認でき、その分野における先進事例、モデルケースとして認識されている。

添付資料 2. 支援実績 (文化・芸術領域×地域・社会課題)

地域密着プログラムの一つの特徴として、文化・芸術活動を通じて社会課題に対して創造的な解決策を探る案件が「地域・社会課題対応型事業」の枠で採用されているところにある。この枠において、2016年度まで遡って各案件がどのような文化・芸術領域と地域・社会課題の掛け合わせが多かったのかを以下のようなヒートマップで表す。

地域振 ャル・ 防災・ 富士山 ものづ 暉. スポー インク ルージ 観光 産業 福祉 医療 教育 子育て 静岡 その他 災害 まちづ くり 復翩 空港 くり ョン 5 3 4 1 1 1 音楽 3 3 2 美術 1 1 1 演劇 3 1 1 4 舞踏 2 1 映像 1 1 建築 1 デザイン メディア 1 伝統芸能 3 2 5 2 2 1 生活文化 3 3 その他 3 1 5 4 2 18 4 9 30 2

図 5 文化・芸術領域×地域・社会課題のヒートマップ

一番多かった組み合わせが一番濃い色でハイライトされている美術×地域振興・まちづくりだった。 その次に生活文化×地域振興・まちづくりと音楽×教育のものが挙げられる。

なお全般的に社会課題領域としては「地域振興・まちづくり」を目標としているものが一番多かった。豊かな地域づくりに向けて多岐多様な創造活動が展開されたことが確認された。